SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

検証 いのちの「はかなさ」を見つめて：米国の中絶論争に学ぶ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田島, 靖則 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/6706

報告2

検証　いのちの「はかなさ」を見つめて

――米国の中絶論争に学ぶ――

田島　靖則

私は一〇年前にこの静大の五〇周年のシンポジウムにお呼びいただいた後、熊本にあるキリスト教の大学の教員になり、そこでキリスト教関係の科目と社会福祉関係の科目を教えていました。その中で、四年前に招聘を受け、今は東京大田区にある教会の牧師と付属幼稚園の園長をしています。一〇年前は「科学と宗教の対話」についてお話しさせていただきました。結論から言うと、それはまったく進んでいないのですが、科学と宗教をどこでどう切り結ぶのかという一番分かりやすいサンプルが、アメリカの中絶論争だと思いますので、今回はそのことについて考えたいと思います。なお、本日は哲学者の松田先生、医学者の石川先生とご一緒なので、私は宗教者としての視点でお話を進めたいと思います。

〈いのち〉をめぐる宗教的・社会的現象としての米国の「中絶論争」

米国の大統領選では、中絶に関する論争がしばしば起こります。すなわち、共和党の候補者と民主党の候補者のどちらが大統領になるかによって、アメリカの生命倫理についての方向性が変わってくるということです。アメリカでは、人工妊娠中絶の問題は極めて政治的な問題であり、社会的な問題でもあるのです。

図1は、デモンストレーションの写真です。アメリカでは、人口妊娠中絶・絶対反対の人たちをプロライフ（Pro-Life）派と呼びます。それに対し、人工妊娠中絶をきちんと法制化して引き続き容認していきたいと思う人たちをプロチョイス（Pro-Choice）派と呼びます。この写真には赤

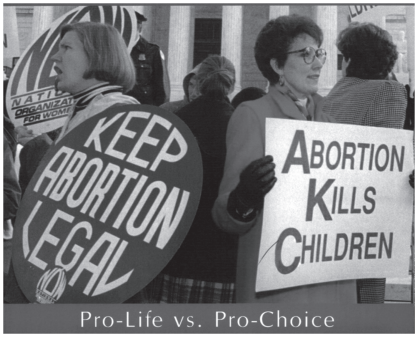

図1　中絶論争のデモンストレーション

い服を着た女性と、青い看板を持った女性が写っていますが、青い看板の方には「Keep Abortion Legal」と書いてあります。こちらがプロチョイスです。赤い服を着ている方の女性は「Abortion Kills Children」と言っており、こちらがプロライフです。人工妊娠中絶は子どもを殺す、非常に過激にも聞こえる主張ですが、実は極めて宗教的な価値観に基づいて、このプロライフとプロチョイスの主張がなされているのが特徴です。特にプロライフの人たちの主張は、アメリカではキリスト教の価値観と固く結び合っています。ブッシュ前大統領はプロライフ寄りで、人工妊娠中絶絶対反対の人たちが支持していたのですが、新しい民主党のオバマ大統領はどちらかというとリベラルですから、プロチョイスの方が強くなっています。

プロライフ対プロチョイスは、いろいろな言葉に置き換えて考えることができます（表1）。中絶反対派のプロライフは生命優先主義で、中絶容認派のプロチョイスは選択の自由優先主義です。それから、プロライフは胎児の人権を、プロチョイスは母親の人権を唱えています。

また、理想主義のプロライフに対して、現実主義のプロチョイス。政党で言えば、大雑把に言って、共和党対民主党となります。もちろん共和党の中でもプロチョイス寄りの人もいるし、民主党の中でもプロライフ寄りの人もいますが、だいたいそれぞれの党を代表する意見は、共和党＝プロライフ、民主党＝プロチョイスと分かれるのです。また、これは厳密ではありませんが、宗教対科学だというように大雑把に割り切って説明をすることもあります。プロチョイスを押している人たちの多くはキリスト教徒ですから、そ

表1　プロライフ対プロチョイス

Pro-Life	vs.	Pro-Choice
プロライフ 中絶反対派	対	プロチョイス 中絶容認派
生命優先主義	対	選択の自由優先主義
胎児の人権	対	母親の人権
理想主義	対	現実主義
共和党	対	民主党
宗教	対	科学
Sanctity of Life 生命の尊厳を優先	対	Quality of Life 生命の質を優先
生命＝人格	対	生命≠人格
保守キリスト教	対	自由主義キリスト教

う簡単に宗教対科学とも言い切れない部分もありますが、宗教的価値を重んじているプロライフと、機械論的な科学というか、科学の進歩に身を委ねていこうと考えるキリスト教徒たちが押しているプロチョイスとも分けることができます。

社会福祉の分野ではよく聞かれるＱＯＬ（Quality of Life）とは「生命の質」という意味ですが、プロライフはこのQuality of LifeではなくSanctity of Lifeを主張しています。つまり、プロチョイスの人たちは生命の質が重要だと主張し、プロライフの人たちは生命の尊厳がすべてに優先されると主張するのです。また、プロライフ（中絶反対派）の人たちは、生命＝人格であるという生命観・人間観を持っています。つまり、先ほどの松田先生の話にあった受精卵や胎児をどう見るかということです。プロライフの人たちは生命＝人格ととらえるため、中絶は絶対に許せないということになる。ところが、プロチョイスの人たちは、生命＝人格とは言えない、人格とイコールでない生命もあるという見方をします。ですから、キリスト教の中でもプロライフの保守キリスト教と、プロチョイスの自由主義キリスト教と二つに分かれるのです。

米国の「中絶論争」は対岸の火事か？

この米国の中絶論争は、日本から見ると何をやっているのだろうという感じがするかもしれません。日本では人工妊娠中絶など、「今どき何？」という感じでしょう。先ほどの松田先生の発表を聞いていると、非常にアナクロ（時代錯誤）な話題だということにもなってしまいます。人工妊娠中絶など、今はもう生命科学の問題でも何でもない、もっともっと先まで行っています。しかし、アメリカで大統領選のたびに中絶論争が巻き起こるのはなぜなのか。それは対岸の火事で、私たちとは関係ないことと見ていいのか。私は、本当は日本でも中絶の是非が話題になってもいいのではないかと思っています。

一九九七年に、「酒鬼薔薇聖斗」の神戸連続児童殺傷事件が起こりました。その後、文科省は慌てふためいて、命を大切にする教育をしようといろいろな手を打ってきたはずです。しかし、命を大切にする教育は成果を上げたのでしょうか。昨今のニュースを見ていると、成果を上げたとは到底思えません。私は今、東京の大田区にいますが、朝、ラジオやテレビの交通情報を聞いていると、毎朝と言ってもいいほど「〇〇駅で人身事故が発生したため、山の手線

の電車が止まっています」というニュースが流れてきます。その人身事故の中身は、大抵が自死（自殺）です。毎日そのようなことを聞かされていると、みんなだんだん何とも思わなくなってしまうのです。「山の手線が止まっているなら私鉄で行こう」「地下鉄で迂回しよう」ということぐらいしか考えない、これが今の現実です。それから、つい昨日でしたか、取手で無差別殺傷事件が起こりました。誰も殺されなかったから良かったとも思いますが、ナイフを振り回して誰でもいいから刺してしまおうとした事件は、「また起こったのか」という感じです。これほど、命を大切にする教育は実っていません。あるいは、小学生・中学生が最近また次々と自らの命を絶っています。

このような現実を、私たちはどう見たらいいのでしょうか。命は大切だということは、学校の先生は口を酸っぱくして言ってきているはずです。しかし、その当たり前のこととして語られていることが、上滑りで説得力に欠けるということを子どもたちは見抜いてしまっているのです。命は大切と言いながら、実は命が大切にされていない現実を子どもたちは知っているから、自らの命を絶つという選択肢が出てくるのです。毎日、鉄道事故が起こって、毎日、どこかで電車が止まっている。実際には命を大切にしない社会に自分たちは生きているのだということを、子どもたちは敏感に感じ取ってしまっています。だから、命を大切にする教育と言っても、そのようなものはほとんど絵に描いたもちで、心の中に染み通っていくわけがありません。

米国と日本では、確かに文化がまったく違います。しかし、命をめぐる問題で、大の大人が口角泡を飛ばして議論する姿というのは、日本にはまったくないのです。アメリカにはあります。それが、日本人である私たちから見ると滑稽に見える、大統領選挙のときの中絶論争なのです。それは、命をめぐる問題で大人が大げんかしているという様子です。アメリカの子どもたちは、少なくともそれを見ています。ここが日本とアメリカの大きな違いだろうと私は思うのです。ですから、「今さら、中絶論争？」と思われるかもしれませんが、もう一度、これを振り返ってみたいと思います。

米国の中絶論争

アメリカでも、一八六五～一九七〇年は中絶が非合法とされていました。今聞くと本当にびっくりするようなことですが、すべての州で非合法だったのです。そのために素人の手による中絶行為が秘密裏に横行し、多くの女性が犠

性になって命を落としたという事実があります。そこで一九七〇年、アメリカでかの有名なロウ対ウエイド判決が出されます。これは、テキサス州ダラス在住だった独身女性のジェーン・ロウ（仮名）が、当時すべての中絶を禁じていたテキサス州法が違憲だとして、有能な資格者である医師の手によって、安全に、しかも医療設備の整った病院で、合法的に中絶手術を受ける権利を主張したのです。実は、彼女は当時妊娠中だったそうです。そして裁判所は、米国における全面的な中絶禁止は憲法の定めるプライバシー権行使の不当な制限に当たると判断したわけです。プライバシー権というのが非常にアメリカらしいところで、「それは個人が決定する問題でしょう」ということです。それで中絶禁止は違憲ということになったわけです。ただしその際、妊娠の中断については女性の権利が無制限に認められたわけではなく、連邦最高裁は胎児の人権についての妊娠期間の三期説（Trimester System）を提示しました。そこで一番問題になったのは、胎児の母体外における生存可能性（Viability）です。つまり、胎児が母親のおなかから出ても生きられるのは、どのぐらいからかということです。胎児の人格あるいは人権の確立は、その生存可能性の確立とともに発生するという判断でした。そのときに具体的に裁判所が提示した生存可能性確立の時期が、妊娠二四～二八週でした。

それに対する人工妊娠中絶絶対反対のプロライフ派の立場はどうだったか。実はアメリカでは、政治的にはカトリック教会はそれほど大きな力は持っていないのです。アメリカはプロテスタントによって建国された国ですので、今でも政治的に、あるいは経済的にと言ってもいいのかもしれませんが、大きな影響力を持つのはプロテスタントの人たちです。

話が横道に逸れますが、ローマ・カトリック教会が一九八七年に公表した「生命の始まりに関する教書（教皇庁教理省公表）」というものがあります。これは今、ローマ教皇になっているベネディクト16世が、まだ教皇になる前、教皇庁教理省長官時代に手掛けた文章です。もちろん今もこの文書は生きています。その第一章で、「人間はその存在の最初の瞬間から、人間として尊重されるべきである」と宣言されています。一九六〇年代には、第二バチカン公会議というローマ・カトリック教会の非常に大きな会議があったのですが、その決定の中に「現代世界憲章」というのがあり、その中に次のような文章があります。「生命は受胎されたときから、最高の配慮をもって守られなければならな

い。人工中絶や赤子殺しは最も恐ろしい犯罪である」。キリスト教の教義学的には「霊魂の即時賦与」という言い方をしますが、精子・卵子が遭遇して受精卵になった瞬間に魂が与えられるということです。つまり、宗教的な意味では、霊魂がそこで与えられるという考え方です。

これはキリスト教倫理の中でも主要な議論の一つになるところで、人格の獲得時期はいつなのか。先ほど、生存可能性ということも出てきましたが、そのようなものはローマ・カトリック教会では関係ありません。霊魂の即時賦与なのですから、人間となるのは受精の瞬間です。ですから、プロライフ派の最右翼の人たちは、生存可能性の議論にも組みしないのです。プロライフ派は、米国の中では共和党支持のプロテスタントの保守的な人たちが、その中心的な役割を果たしています。しかし、そのキリスト教倫理などの倫理的な主張は、ローマ・カトリック教会とまったく同じなのです。これは珍しいことで、アメリカではカトリックとプロテスタントは水と油のようなところもあるのですが、中絶反対については完全にタッグを組んでいるのです。

プロライフ派の主張

プロライフ派の人たちの主張については、プロライフの牧師や神父の人たちの説教集がアメリカで出版されています。その一部を私が訳してみましたので、紹介します。まず、「プロチョイスの語彙は、子宮を一掃する、妊娠の終局、生まれる前の子どもを胎児と呼ぶこと、廃棄物、パラサイト、懐胎の産物、原形質の塊、人間になる前の組織体などの婉曲語法に満ちている」。つまり、そのような言い方はすべてまやかしだと言うわけです。英語では、生まれてくる前の胎児は fetus で、普通は baby とは言いません。しかし、fetus という言い方をすること自体がまやかしであり、赤ちゃんは受精卵の段階から baby と呼ばれるべきだという主張です。そこに人格を持った、人権を持った存在が発生しているのだからというわけです。

それから、「われわれの命はわれわれ自身の所有ではない」。これはキリスト教的な一つの主張です。つまり、神様からの預かりものである。日本でも、昔は授かりものという言い方をしたようです。それから、マザー・テレサの言葉で、「もしあなたに子どもが要らないなら、私にください。私は要ります」というものもあります。

「もし女性には中絶を選ぶ権利があると言うのならば、胎児の父親には何の権利もないということになる」。これは父権の復権ということを考える人たちの一つの主張でもあります。アメリカのキリスト教の保守派は概して父権主義的ですから、このような視点から批判することもあるのです。

「胎児は厳密な意味で人間と言えるのかという問いは間違っており、むしろ、どうしたらわれわれ教会は困難な妊娠によって中絶を考えざるを得ない女性や少年や、その家族の隣人となることができるかという問いこそ正しいのだ」という主張もあります。

「胎児、昏睡状態の人、認知症の人、老衰状態の人などに、選択の自由がないことは明らかではないか」という批判もあります。

「中絶をめぐる論争は、この宇宙には目的と意味があるという主張と、この宇宙にはカオス（Chaos）のみがあるという主張との衝突である」。キリスト教徒の信仰を持っている人たちは、宇宙には目的と意味があると考えるのです。進化論を容認する人たちも、その進化にはその目的と意味にかなった動きがあると考えます。

最後に、「家族計画が出現した五〇年代に、女性の母性に疑問を投げ掛けられるようになった。六〇年代には中絶の権利が主張された。七〇年代には中絶が合法化され、母性は人生の選択肢の一つになった。そして今日、母性というものは単なる趣味ということになってしまった」。これは痛烈な皮肉です。

プロチョイス派の主張

一方で、プロチョイス派の人たちの主張はどうなっているか。米国の厚生労働省に相当する機関、Department of Health and Human services のゲイリー・クラム（Gary Crum）が、プロチョイス派が人工中絶容認のために掲げる理由を八点に分類してまとめています。

①中絶は結果的に社会福祉政策のコスト削減につながる。
②中絶は被虐待児童の数を減らし、苦しみを減少させる。
③中絶は貧困家庭の数を減らし、苦しみを減少させる。
④妊娠によって死の危機に瀕している女性から胎児を取り出して妊娠を中止することが許されるなら、中絶もまた許されるべきである。（現実には、これは許されるわけです。日本でも母体優先です。妊娠中に母体が危機に陥ったときには中絶して母体を助けるというのが、

優先順位とされています）

⑤強姦の犠牲となって妊娠した女性から、不必要な苦しみを取り除くために中絶は容認される。

⑥近親相姦の犠牲となった女性から、不必要な苦しみを取り除き、遺伝的家族的混乱を避けるために中絶は容認される。

⑦胎児が障害を持って産まれることが予想される場合、母親の心理的健康を損ない、家族に緊張関係が生まれ、子どもの低質な生活が予想されるならば、中絶は容認されるべきである。（これはQuality of Lifeの話です。生命の質が担保されないのなら、中絶は選択肢に入っていいという主張です）

⑧母親が子どもの性別を選びたいと望む場合、あるいは胎児の身体組織が病気に悩む人々の苦しみを取り除くために必要とされるような場合、中絶は容認されるべきである。（ここで言われていることは、中絶胎児の臓器移植利用など、そのようなことです）

先ほどローマ・カトリック教会のことを言いましたが、それが中絶反対のプロライフの最右翼だとすると、キリスト教の立場での最左翼もあります。それが産児選択宗教連合（The Religious Coalition for Reproductive Choice：RCRC）です。そのモットーは "Pro-Faith, Pro-Family, Pro-Choice" で、「われわれは信仰においてのプロチョイスである。祈りの姿勢のプロチョイスである。中絶は道徳的、倫理的、宗教的な責任ある決断であり得る」という主張です。このRCRCという最左翼の人たちは、六つのテーマを掲げています。

①神が与えた性と出産にまつわる絶対的自由には、中絶の権利も含まれている。

②孤立する女性たちや一〇代の少年たちは、それぞれが道徳的主権的存在である。

③出生前の人命の道徳的位置付けが卑小化されるのは当然だ。

④産児調整として中絶は正当である。

⑤中絶は神聖なものである。

⑥聖書において立証されるプロチョイスの神は、すべての選択を祝福するはずである。

結語

私は福音ルーテル教会（The Evangelical Lutheran Church）の牧師です。これは、プロテスタントのルター派の教会です。世界的に見れば、ローマ・カトリック教会が一番大きいのですが、プロテスタントの中で一番大きいのが、マルティン・ルターの宗教改革でできたルター派、つまりルーテル教会です。福音ルーテル教会は、アメリカの中でも中産階級の人たちの教会です。ですから、アメリカの世論の中ではだいたい、中立中道なのです。そのアメリカの福音ルーテル教会が一九九一年に出した声明を参考までにご紹介します。

中絶についての社会的声明。子宮内で成長しつつある命は、生まれ出るための絶対的権利を持つわけではない。同様に妊娠中の女性は、妊娠を中断するための絶対的権利を持つわけではない。女性と女性の子宮内で成長しつつある命の両者への関心は、共通の生命への責任として表明される。われわれは、神が命の創造主であると信じる。故に数多く行われている中絶行為は、本教会にとって深い憂慮の源となっている。われわれは神が作られた命が失われることを悼む。キリスト者として強く望まれることは、命を守り保つことである。中絶は、ただ選択の最終手段としてのみ、あるべきである。

最終的には中絶容認の立場ですが、それは必要悪としてだけ認められるのだという主張です。

さあ、人間はいつ人格を獲得するのか。先ほどの生存可能性の確立ということとも関係していますが、そこには実はいろいろな説があり、いろいろな生命倫理学者がいろいろな立場を表明しています。しかし、決定打はなかなかないと思うのです。例えば、人間にとって最も大事なのは脳だと思う人にとっては、胎児の脳幹が形成される時期ということになるでしょうが、果たして脳が人間にとってのすべてなのかというと、そうとも言い切れないのではないか。人間は、いつ人間になるのか。生命主義やプロライフの優れた点は、立場上弱者と目される存在の権利を保障できることです。しかし、その生命主義、プロライフの主張が、あたかも機械論的・決定論的に例外なく主張されると大変なことになります。つまり私たちは、キリスト教的には神の委託に忠実であろうとする自由意志は認められているわ

けです。しかし、妊娠したら出産しないと違法だということになると、その人間の自由意志そのものが無意味だということになりかねません。

二〇世紀の古い時代には、機械論か生気論かという生気論論争があり、それは圧倒的に機械論側の勝利に終わっています。しかし、その生気論、例えば「私たちの命には目的がある。私たちが生きていることには意味がある。目標に向かって私たちは生きている」という考え方がどんどん省かれていってしまったために、結局は命の軽視が起こってきていると言えるのではないかと思うのです。現実的には、現在のわれわれに決定的に欠けているのは、人命尊重の倫理や道徳的規範ではないと私は思います。だから、いくら教育の中で命を大切にする教育などと言ってみても、上滑りで効果がないのです。では何が欠けているのかといえば、例えば中絶の問題なら、中絶を選ぼうとする人たちに実現可能なほかの選択肢を用意するための努力です。まったくしていないと言うと言いすぎかもしれませんが、熊本のカトリック教会の病院では、例の赤ちゃんポストを作りました。しかし、あれはカトリック教会が中絶絶対反対を主張するための一つの根拠でもあります。つまり、「私たちは受け皿を用意しました。だから産んでください。育てられないのなら、赤ちゃんポストに入れてください」というのが、あの赤ちゃんポストの出現の経緯です。苦渋の選択をなそうとする女性と生まれ出ようとする胎児、その両者の隣人となるということは、どのようなことか。しかし、その両者の隣人となることが最終目標で、そこにたどり着くまでのプロセスは、いろいろあるのではないかということで、私は米国福音ルーテル教会のあの声明を支持しています。

今の社会は、命の価値を、生産性や効率性で計る社会です。「命は地球より重い」などという言葉は、一九七〇年代かにダッカ・ハイジャック事件が起こったときの福田首相が発した言葉として有名です。しかし、今は「命は地球より重い」と言うだけの社会です。実際には、多くの命が失われていることに手をこまねいて見ている社会です。自死の問題もそうだし、毎日山手線が止まる問題もそうなのです。今は私も幼稚園の園長という形で幼児教育に携わっているのですが、現実に命が大切にされているということを子どもたちに見せる社会にならなければ、命を大切にするということが、子どもたちの心の中にきちんと染み込むことはないだろうと考えています。だから、私たちは滑稽に見えても議論しなければいけない。人工妊娠中絶についても議論し

なければいけないし、死刑制度についても議論するべきだと思っています。